

## 北陸の曳山祭における祭と都市空間の関係性に関する研究

### - 曳山の動きと都市空間の対応関係に着目して -

A study on the relationship between urban space and “Hikiyama-Matsuri” in Hokuriku region

-Focusing on the correspondence of moving mode of “Hikiyama” to urban space-

36130 倉橋宏典

In this paper, 7 cases of “Hikiyama-matsuri”<sup>\*</sup> in Hokuriku region were researched, and the relationship between “Hikiyama-matsuri” and urban space was considered. The way of Hikiyama procession was defined as “Circulation space”, and the space, which was stage-managed by Hikiyama, was defined as “Highlight space”. In the basis of “Principle of circulation”, “Circulation space” became various forms by the difference of urban structure or urban formation. And the “Highlight spaces” which used the feature of the “Circulation space” efficiently was confirmed. It needs to look that what kind of space decide the feature of a Matsuri.  
<sup>\*</sup>(“Hikiyama-matsuri”=Japanese parade float festival)

## 第1章 はじめに

### 1 1 研究の背景

「祭り」日本には数え切れない祭りが存在し、我々は日常「ケ」ではイメージできないような「ハレ」の舞台に移り変わった都市空間を目の当たりにし、その雰囲気や酔いしれる。

地域の祭というものは、皆が共有できる価値を持つ一つの文化の形でもある。そして、それは地域の誇りであり、そこに住んでいることの一つの魅力であり、地域の財産である。

祭とは、都市空間を舞台として繰り広げられ、演出される。その形も千差万別であり、祭は地域の歴史と深く結びつき、その空間構造と密接に関わりながら演じられるものである。従来、祭り研究といえば、民俗学や社会学、人類学のフィールドであった。しかし、都市論的な発想で、視点を場所や空間に転じることで、そこから地域の構造を深く理解することができるはずである。さらにこれからのまちづくりへの手掛かりを得られるはずである。

### 1 2 研究の目的

本研究では、多様な祭りの形式がある中で、曳山祭に着目する。なぜなら曳山祭は都市空間を舞台にして行われるもので、祭礼として都市空間での曳山の移動が行われ最も華やかであり、そこには空間との関係性もまた顕著に現れると考えるからである。

祭における演じる場や、見せる場といった、地域内では共有できている重要な場所が都市空間には存在する。しかしそれらは、普段は目に見えて認識されることなく、直感的にも分かりづらいため、例えば行政の景観計画などにもなかなか出てこないのが現状である。このような場所への意味づけをしなければ、場所は失われていく可能性もあるのである。

曳山は都市空間を移動することが特徴である。そこで、本研究では「曳山の動き」に着目する。ここでいう動きとは、その巡行経路と、見せ場での演出である。「見せ場」と言う時、それは最も引き立つ形で、効率的に使われてきたものとして現在に伝えられているのではないだろうか。曳山がどのように空間を使いこなし、見せ場を作りうるかを記述することには意味がある。

以上のことから、本研究の目的は以下の3点である。

1. 例として取り上げた7つの祭について、曳山祭と空間との関係性を詳細に記述し、その実態を明らかにし、それぞれの町の空間に意味づけを行う。
2. 事例を網羅して考察し、都市空間と曳山祭との関係性を明らかにする。
3. 祭の演出の観点から都市空間計画における論点を考察する。

### 1 3 既往研究のレビュー

祭に関する論考は、柳田国男を始めとした民俗学、人類学的視点による祭全般に関する論考の数は膨大である。その多くは祭の起源の解釈学的研究やコミュニティ論である。曳山祭に関する論考も多数あるが、曳山の形態論に終始している<sup>1</sup>。

都市計画、建築の分野での研究は次のように大別できる。祭で可視化されるコミュニティと都市構造との関係を扱ったもの<sup>2</sup>。

祭礼時の建築ファサード、町家の利用の実態調査から空間演出の特徴を考察したもの<sup>3</sup>。これは祭礼での都市構造というより、街路空間演出におけるディテールの分析である。祭礼時の空間利用を扱ったもの。これは祭礼時の建築や街路空間が、御飯屋や露店、見物客によっていかに利用されているかに関する考察が中心である<sup>4</sup>。曳山に言及しているものもある<sup>5</sup>が、現代の都市空間の変化によって巡行経路がどのように変化してきたのかに対しての考察が中心であり、経路と都市空間との関係の本質は述べられていない。つまりこれらの研究の中には、祭の主役であるはずの曳山と都市構造や都市空間との関係に関する考察は皆無である。ここに本研究の独自性が示される。

### 1 4 研究の構成

まず第2章では、祭り一般に関して祭りとは一体何かと言う事を概観し、「祭空間」、「巡り空間」、「見せ場空間」を定義する。第3章ではそれぞれの事例について、文献、ヒアリング、現地の調査を通じて、曳山と都市空間との関係性を詳細に記述する。また、都市空間との関係性の中で曳山の巡行経路がどのように決まったか、また、見せ場がいかに演出されているかを考察する。第4章では、それらの事例を網羅し、曳山と都市空間の関係性を考察し、都市空間計画における論点を考察する。

### 1 5 事例の選定

山・鉾・屋台の祭りは現行のものに限っても、1500件はくだらず、それぞれは多様な形を持って行われている。

そこで対象として曳山が多い北陸地方の7つの事例を取り上げる。北陸というある一つの文化圏においての曳山祭を対象とすることで、曳山祭の特徴がより鮮明に浮かび上がると考えたからである。なお、北陸にも約50の曳山祭があるとされているために、この7つの事例は、北陸三大祭と呼ばれている、三国、七尾、高岡の曳山祭と、中でも富山には高岡の形



図1 事例とする都市

式を真似た祭りが多く、その代表的なものを選定した。

| 祭礼名     | 祭礼中心神社 | 市町村名      | 曳山神事の開始年    |
|---------|--------|-----------|-------------|
| 七尾青柏祭   | 大地主神社  | 石川県七尾市    | 文明5年(1473)  |
| 城端曳山祭   | 城端神明宮  | 富山県南砺市城端  | 享保2年(1717)  |
| 三国祭     | 三国神社   | 福井県坂井郡三国町 | 宝暦3年(1753)  |
| 伏木曳山祭   | 伏木神社   | 富山県高岡市伏木  | 文化11年(1814) |
| 越中八尾曳山祭 | 八幡社    | 富山県婦負郡八尾町 | 寛保元年(1741)  |
| 高岡身車山祭  | 関野神社   | 富山県高岡市    | 慶長14年(1609) |
| 新湊曳山祭   | 放生津八幡宮 | 富山県新湊市    | 慶安3年(1650)  |

表1 事例対象祭礼一覧

## 第2章 祭りと祭空間

### 2.1 祭りの形式

#### 1) 祭りの語源

マツリ(祭)の語義の一般的な拠り所とされているのが本居宣長の奉仕説であり、マツリ(祭)の語義について、マツリ(祭)は「神に奉仕すること」だと説いている<sup>6)</sup>。つまり、祭りの原義は祭祀である。

#### 2) 祭りと祭礼

特に都市において、祭りは神事を核としたものから次第に見物客を巻き込んだものへと変化する。柳田はそのような祭りを「祭礼」として区別を強調した<sup>7)</sup>。「祭り」に見物客が加わることで、祭りの原義である神事に加え、神は神輿に乗り氏子地域を巡回し、また神輿には様々な美しい行列が供奉するという形ができあがる。祭礼の主役は本来的な神事から神輿の巡行及びそれに伴うより華やかな行列や出し物へと変化していく。このように「神事」を基本とした「祭り」が「見られるもの」へ、そして「演じられるもの」へと変化していく過程を「祭りの都市化」ともいう<sup>8)</sup>。本研究で扱う「祭り」も「祭礼」である。

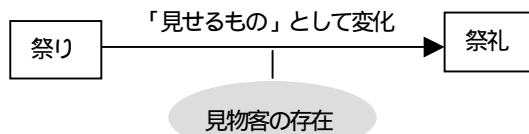


図2 祭りから祭礼へ

#### 3) 祭礼における巡りの形式

祭礼として、祭りはその舞台を氏子地域にまで拡大した。この氏子地域を神が巡るという「巡り」の原理に触れる。もともとの日本の神道観においては、神は祭りの度に遠くから訪れ来るものであった。神の巡行とは、この現れた神を祭場へと送る姿の再現であるとも捉えられている。

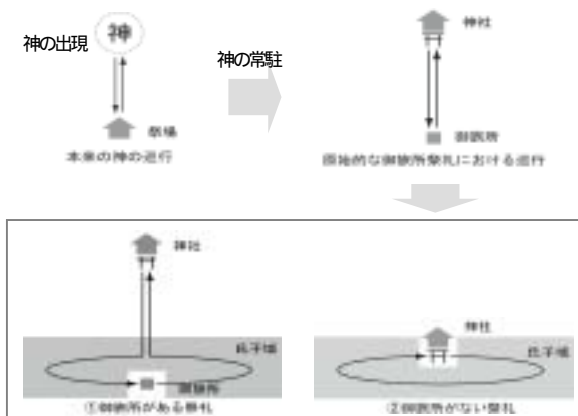


図3 巡りの形式

### 2.2 曳山祭

#### 1) 曳山祭の起源

都市文化としての曳山祭の最初は、京都の祇園会である。祇園祭は初期の頃から御旅所祭礼として始まった。祇園祭を起源とする曳山は疫神鎮定の装置として作られ、町組の発展に伴ってより華麗で豪華な、「見せる」ものとしての様相を呈していった。

#### 2) 曳山祭の伝播と発達

江戸時代に入ると各地でいっせいに曳山祭が始められた。ほとんどは城下町の祭りであり、城下町建設の過程で、京都の祇園祭を真似、藩主との関係を強調するために積極的に曳山祭が導入された。18世紀になると、城下町でない商業町で曳山祭を始める例が目立ってくる。19世紀、文化文政時代から幕末を経て明治に至る時代が曳山祭の最盛期である。この時代は町人文化の全盛期であり、町人が力を持ち、あらゆる工芸分野が発達した。各地の曳山は「見せる」ためにより大きくなり、囃子などの演出もそれぞれに発達していく。こうして、現在の各地の曳山祭りにおいてのおおよその型が完成する。

#### 3) 都市祭礼の窮極としての曳山祭

曳山は賑わいと見せ場を作るために、そして、町人の心意気を見せるために、他の氏子町内と張り合うために、より豪華に、より巨大になっていった。このように、各地の曳山祭りは「都市祭礼」の進化した型を持っている祭りであるということができる。

### 2.3 祭空間

祭りの形式から捉えられる都市空間の構造を「祭空間」として整理する。

#### 1) 祭空間の構成

都市祭礼つまり、神輿の渡御が行われる祭の形態では、まず祭りの領域として「聖なる空間」が周辺地域から浮かび上がる。この区域は氏子の生活圏として捉えられる。それは、厳かな神事を行うは祭祀空間と、神輿や華やかな行列などによって演出される「見せる」空間、「巡り空間」に分けられる。

#### 2) 「巡り空間」と「見せ場空間」

祭礼の特徴は、曳山や神輿が「巡り空間」に挿入されて、それが都市全体を巡るということである。さらに、このような形式の祭りは「見せる」ために「巡り空間」を舞台としてあらゆる工夫をして、空間を使いこなしている。このように、「巡り空間」の中の「見せる」ための工夫をしている空間を「見せ場空間」と定義する。



図4 祭空間の構成

### 2.4 小結

曳山は祭礼の窮極の形態である。すなわち曳山は、なんらかの都市空間との関係性の中で作られ、その中でこそ映えるのではないか、という仮定ができる。したがって、曳山が動く「巡り空間」と「見せ場空間」に着目し、曳山がどのように都市を巡り、どのように祭りを演出しているか、曳山と空間との関係性を探る意味は大きい。3章、4章では、この両空間に着目して考察する。

### 第3章 事例都市における巡り空間と曳山の関係

#### 3.1 はじめに

本章では、事例について、各祭りの巡行マップ、祭りに関する書籍、そしてヒアリングを基にし、祭りの流れと、巡行経路の変遷を追う。また、見せ場の現況、曳山の動き、その場所の空間特長の実態を把握する。そして、「巡り空間」の決定と都市形成、都市構造との関係に着目して考察する。次にそれぞれの祭りの「見せ場空間」について、曳山がどのように動くか、その空間の性質や形態はいかなるものか、どのように曳山が空間を利用して祭りを盛り上げているかを詳細に記述する。このようにして明らかになったその巡行経路、祭りの特徴、見せ場が、都市空間の構造とどのように関係するのかを7つの個々の事例について考察する。

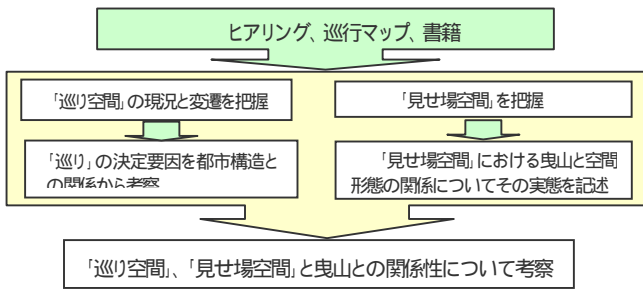


図5 事例分析のフロー図

#### 3.2 石川県七尾市青柏祭における祭空間

##### 1) 七尾青柏祭の概要

石川県七尾市は能登半島のほぼ中央に位置し、富山湾に面した人口約5万人の港町である。ここでは毎年5月3・4・5日に青柏祭という曳山行事が執り行われる。青柏祭の起源は天元5年(982年)とされている。七尾市の旧市街地を3つの信仰区分に分ち持つ神社の一つである「大地主神社」の春の祭礼であり、3つの山町が中心となり、各々一台づつ、計3台の「でか山」と呼ばれる曳山を出す。曳山は直径2mもある車輪の上に高さ12m、幅3.6mの扇形の巨大な檜舞台を持ち、重さが20トンもあるといわれている勇壮なものである。昔のままの狭い道路を舞台として行われる曳山祭は、「でか山」と曳き手、観衆でいっぱいとなり、まさに一体となった盛り上がりを見せる。

##### 2) 「巡り空間」と都市構造

七尾の「巡り空間」の特徴は、線状の経路の往復が基本である。全体的には幅員が5~8mであり、北へ伸びる観光施設への経路は近年付け加えられた。いかにしてこの経路が決定したのだろうか。

近世城下町時代に、藩から、町のシンボルとして財力のあった府中町、魚町、鍛冶町の3町に曳山を出す指示があった。鍛冶町以外の町内は祭礼の中心である大地主神社の氏子ではなかった。したがって氏子町内巡回の必要がなかった。

七尾は内浦街道沿いの街道町と城下町という両面性を持って発達した。従って、曳山の巡行経路には街道が選択された。このように、直線的な旧街道の往復がメインの経路になり、これを基本の



図6 近世七尾の都市構造

経路としながら、近年では新たに都市施設の建設によるルートの付加が見られる。これは、観光化の流れによる変化である。



図7 青柏祭の「巡り空間」、「見せ場空間」と山町

##### 3) 「見せ場空間」の実態

「辻廻し」...高さ12m、奥行き13m、幅3.6mもの巨大な曳山を方向転換させる。狭い町角で直角に山車を廻すには、曳山の停車位置などに長年の経験と勘が必要であり、非常に危険な作業である。そのため曲がる動作は観衆も血を沸かす、祭のクライマックスの場となっている。特に、鍛冶町付近のコの字に曲がった街路はこの技術を発揮する場所が短い場所に4箇所連なる。もともとは、城下町時代の防衛の目的で作られた折れ曲がりの連なりであり、街路幅員も5m~8mで非常に狭い。そのため、この場所は盛り上がりを生む貴重な「見せ場空間」となっている。



図8 鍛冶町の角



写真1 曲がる曳山

「朝山」...印鑰神社からの直線270mの街路を府中町の曳山が曳きだされる行事。午前1時に始まるこの「朝山」は、町内中から人が集まり曳山を曳き、その曳山はどんどん加速していき、猛スピードで走り出す。しかも、この街路空間は幅員約6mしかなく、加速していく曳山は少し間違えば周囲の民家や電柱を壊しかねない。このスリルが朝山の魅力である。印鑰神社から曳山を曳き出すのはこの府中町のみでありここでは、狭い街路形態と、直線という構造が演出を決める要因として必要不可欠であり、曳山は速度を速めることで祭りを演出している。



図9 朝山の舞台



図10 街路断面

「大地主神社への勢揃い」...全ての曳山は神事のために祭礼の中心である大地主神社へと向かい勢揃いをする。3基の曳山が勢

揃いするこの数時間は、祭りの一つのクライマックスである。大地主神社へと集まった曳山は、縦に並んでもその駐車場には入りきれないために、神社の参道を中心として弧を描くように配置される。このとき、駐車場という空間は曳山と鳥居とで囲まれた、一種の広場へと変貌する。ここでは、曳山の動きは停止し、集合することによって場を演出する。



図11 曳山の配置



写真2 大地主神社への勢揃い

#### 4)「巡り空間」「見せ場空間」と曳山の関係性

決定した「巡り空間」の特徴は、直線的な狭い街路であった。そのため、数少ない曲がり角は「曲がる」という動きに変化する「見せ場空間」であり、貴重な空間となる。神社へ勢ぞろいする曳山の演出は、神社駐車場を使い、曳山が揃うことで、一時的な広場な空間を作り出していた。このように祭りは、その「巡り空間」の特徴に合うように考えられ、作られ、使いこなしてきたといえる。また、曳山のスケールに対する街路の狭さや直線の形態をうまく利用し、「朝山」という見せ場を作っていた。「まがり」という形態にも適応し、「辻廻し」と言う技の一つの見せ場としてきた。中でも、曲がり角が連続する鍛冶町付近のコの字の空間は祭りにとっての必要不可欠な場所であった。このように、曳山の経路に着目することで、祭りにとって非常に重要で意味のある空間が浮き彫りにされてくる。

### 3 3 福井県三国町三国祭における祭空間

#### 1) 三国祭の概要

三国町は、九頭竜川の河口に位置している、中世に起源を持つ湊町である。かつて江戸後期～明治初期にかけては北前船貿易によって、その繁栄を欲しいままにしたが、現在は漁港として、過去の繁栄の姿をひっそりとした佇まいの中に残す町である。

三国祭りは三国湊の惣社である三国神社の祭礼であり、宝暦3年(1753)初の笠鉾が神輿の行列に加わったとされている。これを起源として、曳山に人形を飾る現在の形になったのは18世紀の終わりごろであるといわれている。毎年5月19日を宵宮(前祭り)とし、20日が本祭であり、毎年約30の町内の当番制で曳山は6基出され、その巡行は20日の本祭にて行われる。次の21日は後祭である。行列は基本的に、曳山が神輿をはさんで、前に2基、後ろに4基つき、順番に巡行される。巡行中には、屋台の中で笛、大鼓、三味線の囃子が絶え間なく続き、祭りを盛り上げる。

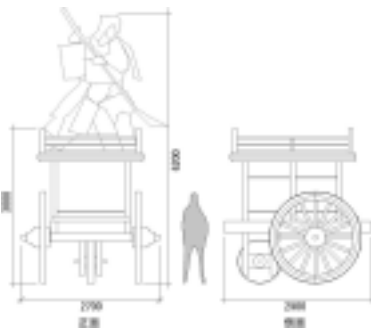


図12 旭区の曳山の寸法(筆者実測)

#### 2)「巡り空間」と都市構造

三国祭の「巡り空間」は、まず三国神社を中心として市街地が

地形に沿うように帯状に広がっていったことが屈折の連続する形態を作り出した。これらの町の表通りとしてあった下町通、上八町通の2つの通りを基本とした経路であり、曳山を出す町内を巡りの範囲とした。それらのほとんどは4~6mの狭い街路であった。さらに、明治期の滝谷出村と三国湊の合併によって曳山を出す町内が拡大し、経路が拡大したという経緯もある。



図13 三国祭の「巡り空間」「見せ場空間」と町内



図14 三国の都市形成



図15 三国の地形

#### 3)「見せ場空間」の実態

「三国神社前への勢揃い」...各町内を曳きまわされて出発した曳山は、午後11:00頃にこの広小路へ集合する。神社への拝礼と神輿に供奉するためという、祭の形式にのっとった行動でもあるが、広小路と言う空間をうまく使い、曳山を見せ、演出するための行動とも捉えられる。この広小路は、川に行くに従ってほんの少しカーブしており、その幅員も狭くなる。したがって、神社から通りを見ると、あたかも広場のように閉じた空間として認識される。この広場の縦方向一杯になって、曳山が勢揃いするのである。周囲の建物も2階建てであり、より曳山の大きさが引き立つようになっている。



写真3 立ち並ぶ曳山



図16 曳山の配置

「狭く曲がり道が連続する街路空間」...特に下町通りの街路空間は曲がり、クランク、彎曲、坂、狭いという街路の形態を持っている。4m~5m程度と非常に狭い道を巡行する曳山は、巨大な屋台を軋ませながら右折左折を繰り返しながら進み、まさに緊張感と盛り上がりを生む見せ場なのである。なお、三国の曳山はこの形態の街路を曳行しやすいように3輪である。曳山は空間に合わせてその形態も作った。



図17 屈曲する街路空間

写真4 曳行される曳山

#### 4) 「巡り空間」「見せ場空間」と曳山の関係性

三国祭では経路として選択された下町通と上八町通が「巡り」の主な舞台であった。町中の経路が非常に狭く、彎曲、屈折していることが特徴である。したがって、勢揃いできる空間として広小路のような空間を選択的に利用している。また、この「巡り空間」の特徴を利用した見せ場や、曳山の形態を作り出していた。このように決定された「巡り空間」の形態に合わせて祭りは発展し盛り上がりを見せてきた。

### 3 4 小結

以上のように計7つの曳山祭をその「巡り空間」「見せ場空間」に着目して分析した。巡り空間は、その都市の形成過程や地形などのによって、様々な形になる。そして、その形態の特徴をうまく、効果的に利用した「見せ場空間」が認められた。同じ曳山祭でもその祭の演出法や見せ方にはそれぞれに多様性が確認できた。

## 第4章 曳山祭と都市空間の関係性

### 4 1 はじめに

本章では、事例とした7つの曳山祭を網羅し、都市空間と曳山との関係性を明らかにする。そして、都市空間計画における論点を考察する。

### 4 2 「巡り空間」の共通性と多様性

#### 1) 巡りの共通性: 「巡りの原則」

各祭礼の巡り経路の決定要因を整理すると表2になる。

巡りの決定に関して、個々の事例における巡りの変遷、都市構造との関係を追うと、ある原則が導き出された。それは次のように記述できる。これを「巡りの原則」と名付けた。

#### 巡りの原則

1. 「御許へ往く」 ... 神の許(神社、御旅所)へ立ち寄る
2. 「領域を持つ」 ... 曳山を出す町内が基本の領域となる
3. 「おもてを選ぶ」 ... 領域内の町内の表通りを選ぶ
4. 「等しく巡る」 ... 曳山は物理的障害をある場合を除いて領域内の町内を等しく巡る

| 祭礼名    | 要因(起点、途中で寄る特徴的な場所に関するもの) | に関するもの            | 要因(経路選択に関するもの)    | 要因(順路と、経路通過の回数に関するもの)                |
|--------|--------------------------|-------------------|-------------------|--------------------------------------|
|        | 大地主神社( )<br>能登食祭市場       | 旧城下町の範囲(3町は氏子でない) | 旧内藩街道             | 往復(同じ場所を2度通る)                        |
| 城端曳山祭  | 善徳寺<br>御旅所( )            | 旧本町と属町(本町が山町)     | 本町の各表通り           | 提灯山を含めず一度通るのみ<br>提灯山と勢揃い、リートが隔年交代    |
| 三国祭    | 三国神社( )<br>三国駅前          | やま番町内<br>範囲       | 各町内の表通り           | 通り抜けできない場所以外、行列は一度通るのみ               |
| 伏木曳山祭  | 本町広場<br>伏木神社( )<br>新町大通り | 山町範囲              | 各町内表通り<br>発達した裏通り | 通り抜け不可能な場所以外は一度<br>昼山と提灯山が旧町と新町で隔年交代 |
| 八尾曳山祭  | 開名寺<br>八尾八幡社( )          | 旧町全体              | 2本の表通り            | 下新町のみ往復<br>西上り・東上りの隔年交代              |
| 高岡御車山祭 | 坂下町<br>廣野神社( )<br>寺社     | 山町を中心とした氏子<br>範囲  | 旧比内街道<br>氏子町内表通り  | 通り抜けできない場所以外は一度通るのみ                  |
| 新奏曳山祭  | 放生寺/幡宮( )<br>市役所         | 山町範囲              | 各町内表通り            | 一度通るのみ<br>昼山と提灯山の隔年交代                |

表2 巡りの決定要因(要因の中心は祭礼の中心)

### 2) 巡りの多様性

「巡りの原則」によって巡り経路は決められる。だがその形は様々である。例えば、七尾は線状であり、伏木は複雑に入り組んで広がり、新奏や三国は線と面が絡み合った形態である。この違いは主に次の理由から生まれる。

#### 都市形成と曳山創設過程

曳山の創設が都市形成の過程といかに関わるかによって巡行経路は違いを帯びる。七尾と高岡では城下町として街道を基本とした都市計画による町が創設され、城主の意向によって曳山祭りが始められた。経路となる街路空間はその初期から決定していたし、領域も変化しない。比べて、他は商業町として自然発生的に形成された町であり、曳山を出す時期も町内によって異なった。町内が増えるにつれ「領域」が増え、「おもて」を連結しながら巡行経路も延長していく。そのためにその経路はより複雑になる。

#### 地形による都市構造の違い

ここに、地形という要因に基づく町内の連なり方に対する制限が加わる。城端では地形的な制約によって町内が広がることは無かった。三国や八尾も、地形的な要因が町内の連なり方を決定していた。それに比べて伏木では、地形的な制約が少なく「領域」が拡大し、裏通りも発達した。発達した裏通りは「おもて」と化し、巡行経路に含まれるようになる。このように違いが現れる。

### 4 3 「巡り空間」の特徴と見せ場の関係

| 祭礼名称   | 「巡り空間」の特徴と「見せ場空間」との関係  |
|--------|--|
| 七尾青祇祭  | 直線経路が経路となった。したがって数少ない曲がり空間が御旅所の盛り上がりを作る場となった。特に鍵形の曲がり空間が非常に貴重な場所となった。また、直線状の街路を勢よく曳き出すという演出もあった。 |
| 城端曳山祭  | 領域の境界で折り返す必要があった。したがって、ここでのおりかえしを「まわりあい」と名づけ、見せ場にした。ゆったりと進む行列の勢揃いも見せ場となった。                       |
| 三国祭    | 空間の特徴が曲がりの重なった街路空間であった。曳山は三輪になり、空間に対応し、右折左折を繰り返しながら練り歩く姿をその特徴とした。町中の街路空間が狭いため、「そろろ」場をうまく選択した。    |
| 八尾曳山祭  | 坂と言う地形がそのゆったりと動く行列の姿を作り上げた。そして各町の交点にある曲がり空間を「かどまわし」と称して腕の競いどころとして利用した。                           |
| 伏木曳山祭  | 入り組んだ曲がりを勢よく曲がることを見せ場としていた。ぶつけあうという伏木ならではの見せ場があった。勢揃いできる空間は貴重であった。                               |
| 高岡御車山祭 | 城下町、商業町として賑やかな曳山を作りあげ、真っ直ぐな街路形態を使って行列をなして進む姿を見せる工夫があった。方向転換が見せ場として重要な場所であった。                     |
| 新奏曳山祭  | 13基もの曳山行列が列をなして動く姿を一堂に見せる事を可能にする直線状の街路形態があった。また、まがりを勢よく回すという演出も見られた。                             |

表3 「巡り空間」の特徴と各祭の「見せ場空間」との関係

## 第5章 結章

### 5.1 結論

曳山祭は原則を基に「巡り空間」を形成するが、その巡りの型は都市構造によって異なるものとなる。その中で、曳山という装置を共通としながら、それぞれの「巡り空間」の特徴を生かし、「見せ場空間」として使いこなしてきた。どのような演出がなされるかもまた、「巡り空間」の街路空間の特徴に関係する。つまり、都市空間と祭はまさに対応関係の中にあるのだ。

またそれは逆に言えば、見せるため、盛り上がるための空間の形態がそれぞれの祭りには存在するといえる。祭はそれが盛り上がるための空間の形を要求しているのである。どのような構造が祭りを作りあげているのか、注意深く見る必要があるのだ。

### 5.2 祭から計画の視点へ

都市空間計画の際に、「巡り空間」と「見せ場空間」に着目する事は有意である。それは例えば以下のような場合であろう。

#### 1) 守るべき場所を選ぶ基準

曳山の巡行がどこで盛り上がっているのか、その空間構成を把握することは、なんでもない空間に守るべき場所としての価値を見出すことができる。

#### 2) 景観整備の一つの基準

曳山との関係性において、街路空間の景観整備に関するヒントも得られるだろう。例えば、直線状の街路で曳山の行列を見せることを主として発達した町であれば、行列が並んだ際に、ごちゃごちゃした看板などの町の装飾を排除する理由にもなる。地域で価値が共有されている祭りだからこそ、この可能性は大きい。

### 5.3 おわりに

「祭」といえば、工芸品としての曳山の形や、神事としての式次第が文化を受け継ぐものとして捉えられている。だが、「祭」という文化は、都市の形という物的側面に支えられて存在しているのだ、ということをお忘れてはいけないのである。

#### 【主要参考文献】

- 植木行宣、〔山・鉾・屋台の祭り - 風流の開花 - 〕(2001)、など
- 陣内秀信(1992)、「伝統的祭祀にみる東京の都市空間構造に関する研究」、第一住宅建設協会 桂英昭他、「都市における祭礼空間の研究」、日本建築学会大会学術講演要録概集(1996)pp217-223・同(1997)pp561-567を始めとした一連の研究 山野信彦他(2002)、「近代における東京の祭礼空間の変容に関する研究」、第37回日本都市計画学会学術研究論文集 pp661-666
- 谷直樹・増井正哉他(1991)、「都心市街地の形態と祭礼演出に関する研究 京都・祇園祭山鉾町における伝統と変容」、都市計画論文集、Vol26 pp7-12を始めとした一連の研究
- 増井正哉、谷直樹他(1992)、「歴史的都心における伝統的共用施設の現代的機能に関する研究」、第27回日本都市計画学会学術研究論文集 pp247-252 など
- 黒川朋広他(1996)、「千葉県佐原市の山車祭りに見る都市の祭礼空間とその利用に関する研究」、ランドスケープ研究59(5)、pp245-248 など
- 本居宣長、「古事記伝」
- 柳田国男、「定本 柳田国男集・第10巻」、筑摩書房
- 米山俊直(1983)「都市とまつり」、新都市37(3) pp11-16、都市計画協会「七尾市史」資料編第6巻(1972)、七尾市史編纂専門委員会「青柏祭の曳山行事記録写真集」(1998)、青柏会事務局「修訂三国町史」(1983)第五〇図版、三国町史編纂委員会「三国町百年史」(1989)、三国町百年史編纂委員会「三国の曳き山車まつり展」(2000)、三国町郷土資料館

事例都市の考察からは、個々の都市の「巡り空間」の特徴が曳山による祭りの演出、「見せ場空間」の特徴を作ってきたという関係が見られる。簡単に、事例都市の祭りの「巡り空間」の特徴と、「見せ場空間」での演出の特徴との関係性をまとめた。(表3)

曳山は「巡りの原則」のもと、都市構造に裏付けられた巡り経路を巡る。この街路空間を舞台として、曳山は動きとその状態を変化させることによって祭りを演出するわけだが、演出はそれぞれの都市の「巡り空間」となった街路空間の形態、構造をうまく使った方法でなされる。このように、曳山という装置を共通のものとしながらも、個々の都市における特有の「見せ場空間」が作られている。ここに、祭りと都市空間の関係性が確認できる。

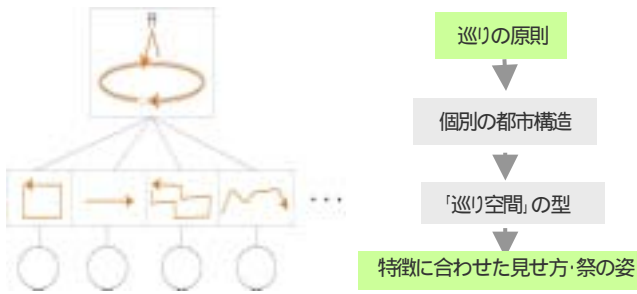


図18 都市空間と祭りの関係性、概念図

### 4.4 「見せ場空間」における曳山の演出：「見せる作法」

曳山は「見せ場空間」の中でどのように動き、状態を変化させて祭りを演出しているのか。それを「見せる作法」とし抽出する。曳山が特別な見せ方をする「見せ場空間」はその都市の固有性を表す空間である。したがって、これらの空間は曳山祭を都市空間計画に生かす際に、見るべき空間として浮かび上がる。

| 「見せる作法」  |  | 説明  |
|----------|--|---|
| 「まがる」    |  | 巡り空間の形態に合わせて曳山を曲げる。ほぼ全ての事例において、巨大な曳山を曲げる場面は見所になっている。より危険な場所が技の競い合いの場として利用されている。     |
| 「おりかえす」  |  | 領域の境界や、などで曳山を引き返す際に、180度の回転をする作法である。その迫力を見せるものとしている。城端や三国で見られる作法である。                |
| 「そろろう」   |  | 曳山を勢揃いさせる。全ての祭りにおいて見出せる。新たに付加させた見せ場もこの作法を用いることが多い。曳き手廻り休憩に入るなど祭りの進行の中で必要不可欠な行動が伴う。  |
| 「列をなす」   |  | 曳山が行列を作って進む姿を見せる作法である。一条乱れぬ行列を作って経路を巡行する。直線街路でこの作法が一番映える。新湊、高岡、八尾、城端で見受けられる。        |
| 「まわる」    |  | 比較的に広い空間で曳山を回転させる。動きを急激に変化させる。この演出は、曳き手が勝手に行うことが多い。「おりかえし」をさらに発展させた形である。            |
| 「ぶつけあう」  |  | 伏木ではぶつけあうという演出の作法が見られた。7つの事例の中では特異な例である。最も激しい動きをする作法である。                            |
| 「勢いをつける」 |  | 七尾では「朝山」という行事があった。また曲がり角を勢いをつけて曲がることで「まがる」作法を演出することも新湊などでは見られる。速度をつけることで迫力を増す演出である。 |
| 「装いをかえる」 |  | 曳山自体の昼夜の装いを変化させて見せる作法である。城端、伏木、八尾、新湊では、曳山は昼は花山、夜は提灯山となる。これがお祭りの変化をも利用した演出法であるといえる。  |

表4 「見せる作法」